

氏名(本籍)	劉 權 敏 (台湾)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第5221号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日本古代の天皇観 - 『万葉集』を中心に -
主査	筑波大学教授 文学博士 伊藤 益
副査	筑波大学教授 文学博士 笹澤 豊
副査	筑波大学教授 博士(文学) 桑原直己
副査	筑波大学准教授 Dr. phil. 小野 基

論文の内容の要旨

本論文は、以下の七つの章によって構成されている。「序章」、「第一章 天命思想・祥瑞思想の受容と変容」、「第二章 天皇の神格－柿本人麻呂と大伴家持を中心に－」、「第三章 大伴家持の伴造意識について」、「第四章 『神代』について」、「第五章 『見る』意識と天皇」、「結章」。

序章は、本論文の目的が、日本古代の天皇観を探究することによって、日本において天皇制が維持されてきた理由を解明することに存する点をあきらかにする。

第一章は、中国風の天命思想とそれに伴われる祥瑞思想が、日本古代においていかに受容され、変容してきたかを論ずるものである。天命思想とは、為政者が善なる存在であれば天の命が下り、悪なる存在であれば天の命は去ると考える思想である。著者によれば、この天命思想は、『日本書紀』において、武烈から継体への政権交代を正当化する論拠として受容されたという。ところが、天命思想は、やがて日本流に焼き直され、天ではなく、天皇家の祖神たる天つ神が命を下す主体となるという形に変容される。それに伴って、祥瑞思想も、祥瑞をくださる主体を天つ神ととらえる考え方へと変貌する、と著者はいう。天命思想と祥瑞思想が日本流に変容されるのは、天武・持統朝においてであった。天武・持統朝は、万世一系の血脈の論理を確定することによって、天武皇統の永続的な繁栄を確保しようと企図した王朝であった。著者は、こうした万世一系の血脈の論理が打ち立てられる過程で、天命思想の和風化が遂行されたのだ、と主張する。

第二章は、柿本人麻呂の吉野讃歌に着目し、そこで持統天皇の御代が「神の御代」と目されていること、並びに、持統が、山川の神々、すなわち自然神の頭上に君臨する神の中の神として描かれていることを明らかにし、人麻呂に天皇を天帝の位置に置こうという意図があったことに論及する。この論及によって、人麻呂が天皇の絶対化を図ったことが闡明されるとともに、さらに人麻呂の影響下にあまたの天皇讃歌を詠んだ大伴家持が、そうした絶対化を確定しようと企図したことが明確にされる。

第三章は、家持の伴造意識の構造に肉薄することによって、それが天皇への絶対的服従を臣下の在るべき姿としてとらえるものであったことを解明する。中国の儒教的論理においては、君主が悪しきものであれば、臣下は道を求めて君主のもとを去ることが認められていた。ところが、家持の伴造意識においては、臣下は君主たる天皇の善悪を問わず、つねに君主たる天皇に全面的に奉仕しなければならない。著者は、伴造意識

のこうした在りようのうちに、中国には見られない、日本独特の君臣関係を見いだす。

第四章では、まず、「むかし」と「いにしへ」とが比較され、前者が現在と断絶した過去を意味するのに対して、後者が現在へと続く過去であることが明らかにされる。そのうえで、著者は、古代文献、特に『万葉集』において、「神代」が「いにしへ」と等置されていることを示す。著者によれば、現在へとつながる「いにしへ」としての「神代」は、古代日本人にとって、現に在るものの存在根拠であるとともに、正当性の根拠でもあり、さらには永続性の根拠でもあった。そして、その「神代」に存在の淵源をもつ天皇は、現実のあらゆる事物を根底から規定する絶対的根拠であった、と著者はいう。

第五章は、他の不可視の神々とは異なり、天皇が見られる神であったことに着目し、臣下が天皇を「見る」ということがいかなる事態を意味していたのかを探る。古代日本人にとって「見る」ことは、単なる視覚の能力にとどまるものではなく、対象の内部に肉薄し、その奥底にこめられた本質を彼我一体的にとらえることを意味していた。著者によれば、古代日本人は、天皇を「見る」ことによって、天皇の存在が高天原の時代から連続と続く聖性を担って在ることを瞬時に認識したのだと、という。

結章は、これまでの考究を総括しつつ、日本における天皇制の連続たる持続は、古代において確立された、万世一系の血脈の論理や、天皇即神論、あるいは伴造意識などが、互いに相俟って、天皇の存在を権力の根源に置いたことによって可能になったものではないか、という見解を示唆的に述べる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

万世一系の血脈の論理や、天皇・皇室への絶対的服従の念を披瀝する伴造意識などが古代日本人によって鼓吹・宣揚されてきたことについては、多くの論者によって多様な論究がなされてきた。その意味において、本論文は、前例のないまったく新たな問題意識を提示するものとはいえない。しかし、天命思想・祥瑞思想についての比較論的視座に立った論究や、天皇を「見る」ことの意義についての論究に関して、本論文は独創的な知見を披瀝するものと認められる。特に、『日本書紀』が編纂のある時点（おそらくは、継体・欽明朝のころ）において、中国風の天命説の受容を図ったという指摘は重要である。『日本書紀』は、天武皇統の歴史意識を如実に反映する奈良朝の正史であり、そこにおいては、天皇の絶対化と革命の防止とが図られる。したがって、同書編纂のある過程で天命説が受容されたとしても、それは革命を否定する論理へと変容されなければならなかった。その変容の経緯を克明に追い、古代天皇制の精神的支柱を浮き彫りにした点において、本論文は従来の研究を凌駕するものである。また、天皇を「見る」ことが、天皇の神代以来の歴史性を一挙に認識することを意味するという主張は、従来の研究には見られない、本論文独自の主張である。「見る」ことをタマフリの意義を担う行為としてとらえる見解は、すでに諸家によって提示されているけれども、それを天皇の始原的過去にまで遡及する行為と見る見解は、他に類例を見ない。本論文は、こうした見解をあらわにすることによって、その独創性を遺憾なく発揮するものといえよう。

ただし、天皇の存在が現代にまで続いてきたことの原因を闡明しようという本論文の意図は、いまだ未解決のままに残されている。古代天皇制は、平安初期に終焉を迎えた政治体制であり、その後幕末から明治初期に至るまでの天皇制は、古代のそれとは異質であったはずである。天皇制全般に関する論究は、この点を抑えた上でなされなければならないのだが、本論文はそこまで踏み込むことができなかった。その意味で本論文には課題も残されているといわざるをえない。

しかし、本論文が古代天皇制の基本構造をとらえた優れた論考であることは、いかなる視点からも否定されえない。本論文は、外国人の日本古代思想研究として最高の水準にあるばかりか、日本人による従来の研究をも乗り超える力作と認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。